

特集

「まちづくり」の「拠点」としての、お寺

「地域に開かれたお寺」の実現に向けて



美術館を思わせるようなモダンな外観

●浄土宗大蓮寺塔頭應典院 [大阪府大阪市]
<http://www.dairenji.com>

應典院(大阪市天王寺区)は、いまから450年前の天文19年(1550年)に創建された浄土宗大蓮寺の塔頭(子院)である。

戦災でいったん焼失したが、平成9年に再建された。本堂は2階建てのコンクリート打ちっ放しで、中には約140人収容の小劇場やギャラリーがあり、寺とは思えない造りに誰もが驚くユニークなものである。

「学び」「癒し」「楽しみ」の提供

應典院の特徴は3つある。檀家がおらず、宗派を問わない会員制による運営と、葬式をしないこと。そして、年間約3万人もの20代の若者が集まる点である。

日本の寺は、もともと庶民とともに「学び」「癒し」「楽しみ」をつくり上げた、いわば 民間主導による「公益」の原点とも言われている。

そうした寺の役割について、應典院の秋田光彦住職は、「世界のNPOの原点は日本の寺であり、まだ公共サービスの概念のなかった時代には、寺が教育(学び)、福祉(癒し)、芸術・文化(楽しみ)といった分野を担ってきたのです」と述べている。

應典院では現在、毎回ゲストを招いて「いのち」を考える講演会「寺子屋トーク」(年6回程度)や、生と死を考える集い「いのちと出会う会」(年10回)、「ブッダ・カフェ」(年8回)などの開催をはじめ、若者を対象とした演劇、現代アートといった芸術活動を通じて、「学び」「癒し」「楽しみ」を提供する仏教本来の「原点回帰」をめざしている。

社会や地域を良くするための人材育成

特に、演劇や現代アートなどのイベントとして発信される「学び」や「楽しみ」のプログラムの多くが、「應典院寺町倶楽部」をはじめとするNPO団体やアーティストとの協働事業として実施されており、應典院は場所と機会を提供し、NPOは演劇やアートの表現スペースとしてその場所を創造してい



劇団による演劇のステージ風景

くことにより、お寺とNPOのパートナーシップが成り立っている。

さらに、最近では、大学との学術協定や行政機関とも連携した活動へと広がっている。

そのねらいは、若者たちに対して演劇や現代アートを一つの手段として、人間関係の構築や協働の精神の醸成、異なる価値観への「気づき」を促すことにより、社会や地域を良くするための担い手となる人材を育成することにある。

寺を拠点としたまちづくりへの取り組み

應典院では、行政や大学との協働によるNPO「上町台地からまちを考える会」の立ち上げに参加するなど、まちづくりにも積極的に取り組んでいる。

應典院周辺のまちなみは、もともと歴史と伝統のある地域だが、最近では風俗店が増えるなど、居住環境の悪化が目立ち始めている。そこで同じ地域のまちづくり団体と連携し、地域の魅力(人材、風物等)の再発見、PRなどを目的として、月に2回の例会のもと、「まちの学校」と称したまち歩きや、アートツーリズム(観光プログラム開発)などさまざまな取り組みを企画・実施している。

会の代表理事として運営に尽力している秋田住職は、「まちづくりを行政に任せるのではなく、住民やNPOが当事者となって地域の魅力や歴史を掘り起こしていく活動に力を入れています」と述べている。

ここでも、地域住民自らの実践とおした、まちづくりに向けた「学び」が展開されているのである。



演劇に携わる若者たちと(中央が秋田住職)

應典院が実践する芸術、人材育成、まちづくりなどの取り組みは、「地域に開かれた寺」として、寺そのものの存在価値や役割を見直すことを促し、人間の「いのち」の問題にかかわりあえる場、「民」が中心となって社会をつくりあげていくための拠点として成果をあげている。

應典院では、仏教が現代社会にどう活かされるかといった壮大な「問い」のもとで、さまざまな市民活動が続けられている。



「弱さ」への共感を根幹とした地域づくりをテーマとしています

あきた みつひこ
秋田光彦さん
應典院住職

共通の連帯感が乏しくなった現代社会では、とく経済活動が優先されて「勝ち組」「負け組」などという勝手な枠組みで評価されるようになりましたが、私自身は、なお「弱さ」人々の力を信じて、評価し、支援していくことが大事だと思っています。

このまま少子高齢化社会が進むと、私たちは、いや応なく生老病死に向き合わざるを得なくなり、そうした状況では、地域の力によ

て「弱さ」への共感を根幹とした生活共同体を再構築していくことが必要になってくるからです。

應典院での今後の取り組みとしては、例えばガンの末期患者とその家族を対象とした支援活動である「在宅ホスピス支援拠点形成事業」を立ち上げ、まちづくり活動の私なりの総決算としたいと思っています。

住み慣れた場所で最期の時を過ごすのは、人間として自然のことです。そのためには、患者さんや、介護する家族を支えるケア・スタッフやボランティアが必要であり、應典院がその拠点としての役割を果たしていきたいと願っています。

死を病院に委ねるのではなく、地域に根ざした寺として、「弱さ」への共感からはじまる地域の再生、地域に「いのち」を取り戻すための試みが、これからの大きなテーマです。

教会の持つ可能性 を考える

お寺や教会では、市民が集う憩いの場、あるいは人間本来の生き方を見つめ直す場であるという点から、「まちづくり」の拠点としても貴重な役割を發揮すると考えられます。

今月号では、こうした寺や教会が実践している具体的な事例をとおして、その意義や可能性などを検証します。

震災からの復興支援からはじまった 多文化共生をめざしたまちづくり

●カトリックたかとり教会 [兵庫県神戸市]

異国情緒あふれる観光都市として名高い神戸市は、関西でも有数の外国人住民の多住地域であり、その中でも長田区は、在日コリアンをはじめベトナム人、フィリピン人、ペルー人、ブラジル人などを中心とした1万人をこえる外国人住民が暮らす国際色豊かなまちである。

震災復興活動の拠点となった「たかとり救援基地」

平成7年の阪神・淡路大震災で、とりわけ大きな被害を受けた地域の一つが神戸市長田区だった。辺り一面が焼け野原となり、昭和2年に設立されたカトリックたかとり教会の建物も全焼したが、そこには、すぐに続々と全国からボランティアが集まり始めたのである。



活動の拠点となった「たかとり救援基地」

そして「まちが復興するまでは教会は建てない」という方針のもと、被災地であった教会が「たかとり救援基地」として、地域の復興活動に動き出した。

活動のきっかけについて、教会の神田^{かんだ}裕^{ひろし}神父は、「幸か不幸か、教会が焼けてしまっ

たことにより、普段は信者さん以外が立ち入ることのない場所を、多くのボランティアの人が集まる拠点として活用することができました」と述べている。救援基地として貢献する気負いからではなく、地域の教会として、ボランティアの思いを具現化していくための場所づくりに協力する考えからだった。

この「たかとり救援基地」が、平成12年にNPO法人格を取得し、「たかとりコミュニティセンター(TCC)」と名を改め、緊急救援活動から多文化共生をめざしたまちづくりの活動へと発展したのである。

現在では、センターを核とした多くのNPO団体のネットワークが構成されている。

多文化共生をめざした多彩な取り組み

震災後の最初の活動は、「被災ベトナム人救援連絡会(現・NGOベトナム in KOBE)」である。

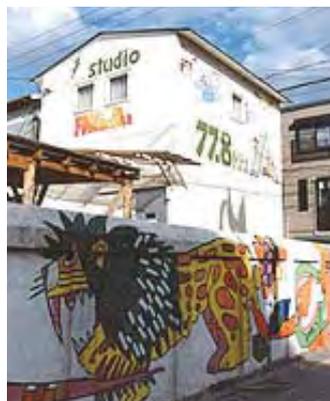
もともと多くのベトナム人たちとの交流のあった教会では、震災

後、ベトナム人被災者の安否を気遣う声が寄せられたことをきっかけに、大阪外国語大学の学生たちや日越友好協会、難民定住センターの人たちとの協働による「被災ベトナム人救援連絡会」が組織された。この取り組みが多くの人にかかわりのある、まちづくりのNGO活動の出発点となった。

「被災ベトナム人救援連絡会」では、活動の一環として、外国人の被災者に対して外国語で情報を流すことを目的として、ミナラジオ局を立ち上げた。その活動は、現在では10か国言語により在住外国人に対する日常の情報を提供するコミュニティFM放送局「株式会社FMわいわい」の原点となっている。

こうして、その時々ニーズに対応してきた結果、多様な取り組みが生まれ、国籍、年齢、障害などによって疎外されることのない多文化共生の「ひとつづくり」、「まちづくり」へとつながっていった。

これまでの活動の経緯について、神田神父は、「ボランティアの人たちに支えられながら、当たり前前の救援行動をしていくなかで、地域ニーズに応じたさまざまな活動が自然発生的に生まれてきました」と振り返る。そして、今後もニーズとアイデア次第で、新たな活動へと波及する可能性を強調している。



10言語による多言語コミュニティ「FMわいわい」

「まちづくりはダチ(友達)づくり」

震災後、たかとり教会は地域住民たちも交えた多くの人たちの出会いの場となり、神田神父の提唱する「まちづくりはダチ(友達)づくり」を合言葉として、復興への輪を広げていった。

この言葉には、教会が「まちづくり」のための出会いの場となり、お年寄りや障害をもった人とも出会っていく。信徒でなくても同じ目的を持つ人たちが集まる場所。それこそが本来の教会の姿であるとの神田神父の「思い」が込められている。

そしていま、阪神・淡路大震災の復興活動から生まれた、たかとり教会の「ダチづくり」は、「防災」や「災害に強いまちづくり」をめざす市民活動の精神として、多くの共感を得ているのである。



「人々の共生」のための活動は、 宗教の原点に立ち返った取り組みです

かんだ ひろし
神田 裕さん
カトリックたかとり教会神父

私たちが現在取り組んでいる多くの活動は、単に震災後の復興支援が主目的ではなく、すべてが潜在的にあった地域課題だといえます。

国籍や言語、文化を越えた「人々の共生」のための活動は、いわばキリスト教会として、宗教の原点に立ち返った取り組みであって、何も特別なことではありません。

キリスト教に限らず、宗教は本来、限られた人々だけのサロンではな

く、地域における大衆酒場や大衆食堂のような役割を担っており、人々の生活のなかに入っていく、「ひとつづくり」や「まちづくり」を実践すべきだと考えます。すべての宗教に共通の、そして究極の目的は、社会全体をもっと平和に、豊かにしていくことです。より良いまちづくりといってもいいでしょう。

そして、こうした共通の目的において、それぞれの宗教が壁を越えてつながれば、人との出会い、異質なものととの出会いのなかから、果たすべき役割が明確となり、そこに共生の心が生まれてくると信じています。

震災によって、不幸にも私たちの教会も一度は瓦礫となってしまいましたが、何もなくなってしまうところから、新たな出会いが生まれ、「人々の共生」という目標に向かって多くのボランティアの方々やNPOとの協働が確立できたことも事実です。

「まちづくり」の拠点として期待されている お寺や教会が果たす役割と可能性



いちかわかずひろ
市川一宏さん
ルーテル学院大学
学長

先の2事例は、お寺や教会そのものが大切にしている価値観などに基づいた実践として捉えることができました。ここでは福祉と宗教の関係に詳しいルーテル学院大学の市川一宏学長に、「まちづくり」の拠点として期待されているお寺や教会が果たす役割と可能性、今後の課題などについて伺いました。

現代社会におけるお寺や教会の重要性とは

日本の経済成長はめざましく、国民の物質的な豊かさを生み出しているが、一方で家庭基盤は脆弱となり、地域における人間関係の希薄化をもたらしていることも事実である。

かつての社会では、古くからの習慣や伝統文化を司っていた宗教によって、人々は自然への敬意とともに、地域における互いの存在を認め合い、かかわりの大切さを確認することができた。それによって自然は守られてきたし、コミュニティが維持されてきた。

そうした文化が失われつつある現代こそ、人々は共存や共生といった人間本来の姿を取り戻す必要があり、また、地域の再生においては、福祉活動の原点として寺や教会が担ってきた役割の重要性が見直されるべきである。

社会福祉の根源としての宗教

宗教と「まちづくり」との関係を考えるうえで、最も端的なものが神道における「祭り」である。

地域の祭りを通じて多くの人々が集い、「神輿」を担ぎ、神社へと向かう行事は、「まちづくり」にとって不可欠といってもよい。共に祝い、喜び、汗を流す「祭り」には、連帯があり、地域への愛着があり、協働で取り組むための一定の規範がきちんと存在しているからである。

また、仏教に起源する「講」制度も、わが国の社会に大きな機能を果たしてきた社会集団の一つであり、福祉の根源となる助け合いの精神に根ざした民衆組織であった。最近の仏教では、例えば「在宅ホスピス事業」など、人間としての自然な形の終末を支える取り組みもみられるようになった。

キリスト教の場合にも、古くから地域の拠点として社会福祉的な活動が展開されており、地域のなかで人々と共に歩み、誰もが平等に精神的な豊かさを享受するために、さまざまな取り組みが実践されてきた。例えばキリスト教主義の社会福祉施設、幼稚園を含む学校は、その代表的な例である。

日本文化のなかでのキリスト教が果たした最大の成果としては、人々の心の「とまり木」＝「拠り所」をつくったことである。福祉サービスやケアの基軸になったとともに、差別され、疎外されてきた人々への多くの働きかけも、キリスト教会がバックアップしてきたのである。

一人ひとりが「かけがえのない」存在である

現在、宗教をバックグラウンドとして、多くのお寺や教会が実践している「まちづくり」や生活支援といった活動は、地域住民が住み慣れたまちで暮らすことを目的とした障害者や高齢者への支援、

青少年の育成、外国人居住者支援や、さらに海外における貧困層の支援まで、実に多彩である。

ただし、お寺や教会が「まちづくり」の活動に取り組むために最も重要となるのは、布教や伝道といった宗教そのものの活動と一線を画すことである。

お寺や教会が地域とかかわるうえで、あくまでも住民と同じ地域の一員として「まちづくり」を考え、実践していくことが大切である。そして、お寺と教会がかかわる活動の基本となるのは、「いのち」の大切さであり、一人ひとりが「かけがえのない」存在であるという、人間としての尊さに対する強いこだわりである。

コンピュータゲームのように、簡単に「いのち」がリセットされる仮想の世界ではなく、自分にも、他人にも痛みがあるという現実と真向かう機会としての「まちづくり」を、お寺や教会は担っていくべきであると考えます。

お寺や教会の資源を生かした「まちづくり」への期待

今後の「まちづくり」の拠点として、お寺や教会のもつ可能性は大きい。それは、地域の人々が交流するための建物や空間といったハコモノの提供だけではなく、いかなるものも排除することのない「共生」や「平等」の精神を「まちづくり」そのもののミッションとして示すとともに、活動の担い手となる豊富な人材を育成し、地域へ還元することができるからである。

また同時に、そうしたノウハウや人材などの資源をどのように掘り起こし、活用し、組み合わせていくかが課題となっていく。

さらに、社協や NPO をはじめとする支援機関との連携・協働においては、何を共通の地域課題とするかを明確に認識して、具体的な合意形成が必要であることはいうまでもない。

多くのお寺や教会が、一般市民に対して開かれた場として、誰もが幸せで平和な「まちづくり」に貢献することを期待している。

